

NON NOVEL



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小^{フィクション}説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—638

緊急シミュレーション 小説日本買収

平成10年10月5日 初版第1刷発行

著者	おおした えい じ
大 下 英 治	
発行者	高 木 昌 幸
発行所	しょう でん しゃ
	祥 伝 社

〒101-8701

東京都千代田区神田神保町 3-6-5

☎ 03 (3265) 2081 (販売)

☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印刷	堀 内 印 刷
製本	明 泉 堂

万一、落丁・乱丁がありました場合、おとりかえします。

Printed in Japan.

ISBN4-396-20638-0 C0293

© Eiji Oshita, 1998

祥伝社のホームページ <http://www.shodensha.co.jp/>

日文 701573640

緊急シミュレーション

小説 大下

日本中央学院図書館
蔵書章

収



NON NOVEL

巨大外資に
呑みこまれる日

目次

序―二〇〇〇年九月

7

1章 ヘッドハンティング

―一九九七年七月

13

2章 英国^{ロンドン}ビッグバン

―一九八六年十月

35

3章 辣腕^{らっわん}マネージャーたち

―日本バブル期

62

4章 巨大外資の侵略

―一九九七年後半

92

5章 多国籍金融帝国の野望

―一九九八年一月

117

6章 大証券の死闘

―一九九八年四月

151

7章 ベンチャーとリスク

―一九九八年八月

183

8章	世界市場の仕掛人 ——一九九八年十二月	206
9章	『401K』解禁工作 ——一九九九年四月	232
10章	自動車メーカーの転身 ——一九九九年後半	259
11章	ヘッジファンドの帝王 ——二〇〇〇年四月	299
12章	“ ^{バブル} 根拠なき熱狂”の終焉 ^{しゅうえん} ——二〇〇〇年九月	325
13章	大連鎖破綻 ——二〇〇〇年十月	347
終章		374

主な登場人物

- まつぎきかつ や
松崎克也……………本書の主人公。卓越した行動力と判断力
でビッグバンの荒波を乗り切るファンドマネージャー。国内大手の「光興証券」から外資大手「レインボー投信」に移籍、日本の金融界に一石を投じるべく精力的に活動。
- リチャード・グレイ……………国際総合金融グループ「スカイ」会長。世界金融帝国構築の野望とともに買収・合併・提携を推進する。
- ジョージ・リンド……………外銀トップの業績を誇る「タウンバンク」を擁する国際金融グループ「タウンリング」会長。ATM（現金自動預入支払機）24時間稼働、全国郵便局との提携など、革新的な戦略で日本市場に食い込む。
- アイザック・カルロス……………ヘッジファンド「ロイヤル・ファンド」主催者・運用者。「相場の神様」の異名とともに、各国の相場に強い影響力を持つ。'98年のアジア金融危機やロシアのルーブル切り下げも彼が引き金を引いたといわれる。
- エヴァ・コルベール……………グレイの女秘書、松崎とグレイとの間の連絡係。
- くり た てるまさ
栗田輝雅……………ベンチャー企業「デジタルワールド」社長。

序——二〇〇〇年九月

二〇〇〇年九月十一日、ニューヨーク株式市場は、ダウ平均工業三〇種の株価が、一万五〇〇〇ドルのピークから、四〇七ドルも一挙に暴落した。

日本政府の金融問題解決が遅々としてすすまないことによるドル高・円安の影響で輸出の減少となり、また長期化の様相を呈しているアジアの経済危機がアメリカの業績悪化懸念を引き起こしたからである。

八七年十月十九日のいわゆるブラックマンデーの五〇八ドルもの暴落にはおよばないものの、世界大恐慌の引き金となるか——と世界的な大混乱をもたらしした。

九月二十八日、円安が、二〇〇円を突破した。

日銀は、ついに公定歩合の引き上げに踏みき

た。〇・五％から、段階的ながら五％まで引き上げた。

そのまま金利を下げつづけていると、一二〇〇兆円とまでいわれている日本の個人資産が、金利の高い海外へ流れてしまう。政府はそれを恐れ、公定歩合を引き上げざるをえなかったのである。

二兆円もの有利子負債を抱える巨大スーパーのコウリユウは、金利が上がり、金利の支払いが年間一〇〇〇億円にもなってしまった。金利だけで、さらに大きな赤字になる。

コウリユウ株は、額面の五〇円を割り、さらに三〇円も割った。

武見和典大蔵大臣が、衆議院予算委員会で、野党民主党の加賀美宗彦代議士に質問された。

「コウリユウが行き詰まっているという話だが、融資している銀行は大丈夫か」

武見大蔵大臣は発言した。

「コウリユウに対する銀行団の協調ができなければ、前向きに助けることはできない。協調が得られ

なくて、コウリュウは会社更生法を申請することになりました」

コウリュウが会社更生法を申請するという情報が流れるや、証券市場は騒然となった。

コウリュウの倒産により、コウリュウに融資している敷島銀行は大丈夫か、というニュースも流れる。

敷島銀行の株価はついに二〇〇円を切り、一〇〇円も切った。

敷島銀行は、ついに額面の五〇円も割った。

敷島銀行への取りつけがはじまった。

敷島銀行の千代田区内幸町にある本店だけでなく、全国の敷島銀行の三四二の支店に預金者がどっと押し寄せた。

あまりの人数に、銀行の中に入れず、入口で喧嘩になっている支店もある。

殴り合いで、パトカーに運ばれた男もいる。

ある支店では、将棋倒しになり、主婦が重傷を負い、病院に運ばれた。

病院で二人が死んだ。

敷島銀行は、資金が流出して、資金繰りがつかなかった。ついに倒産に追いこまれてしまった。

他の銀行も、取り付け騒ぎになってしまった。

敷島銀行につづき、大純信託銀行、やまと債券信用銀行も倒産した。系列のノンバンクもバタバタと倒産していく。

梅花銀行も危ない、との噂もかけめぐっている。

不良債権を抱えこんでいるゼネコンもバタバタと倒産していく。

一九九七年に倒産した東海興業、多田建設、大都工業につづき、黒岩建設、ユタカも倒産した。牛島組もつづくか、とささやかれている。不動産会社も、次々と倒産していく。

解約された金は、かつては関東三光銀行に集まったが、いまはちがっていた。タウンバンクをはじめとする外資系の銀行にほとんどが流れていく。

関東三光銀行の頭取をはじめ幹部は、啞然としていた。

失業者はついに二〇％を超え、犯罪が続出した。

現金輸送車の襲撃も相次いだ。

「オヤジ狩り」と称して中高年男性を襲撃する少年犯罪が全国で蔓延まんえんしている。

政府与党は、野党から解散を迫られていたが、総辞職でなんとかもちこたえていた。しかし、一カ月後の十月には総選挙がひかえている。こういう惨状では、自民党が過半数を獲得するのはとうてい無理であった。連立を組んで与党でありつづけるのか、野党に転落するか、あるいは分裂するか、自民党は追いこまれていた。

日銀は、うろたえていた。

「まるで日本が焦土しょうどになったようだ。日本の個人資産を、このまま海外へ流してはいけない」

海外に流れないようにするため、公定歩合をさらに一％上げ、六％とした。

それでも日銀は追いこまれ、かつてアジアでやっていたように銀行閉鎖せざるをえなくなった。

日本の銀行をすべて閉鎖し、預金者の払い戻しが

できないようにした。

銀行にほとんどの金を預けている者は、現金が手元になくうろたえた。

政府は、また海外への送金を禁止してしまった。

日本から金がアメリカに行かなくなるのでドル債が売られるのでは……とアメリカ市場の債券と株価が大暴落をはじめた。

株価は、一万四〇〇〇ドル、一万三〇〇〇ドル、一万二〇〇〇ドル、一万一〇〇〇ドル、ついに一万ドルをも割った。

が、下げ止まらず、九〇〇〇ドル、八〇〇〇ドル、七〇〇〇ドル、六〇〇〇ドル、ついに五〇〇〇ドル台まで暴落してしまった。

いっぽう円は、二一〇円を超える円安となった。

円が二〇〇円を超えそうになったとき、アメリカのハックフォード大統領と、中国の江沢民チャンツォーミン主席との間で、電話による米中首脳会談がおこなわれた。

その会談で、遅々として進まぬ日本の金融改革に



怒りをあらわに「日本の金融不安は、米中共同の敵」と認識しあった。

ハックフォード大統領は、江沢民の人民元切り下げ回避を支持していた。

「中国は、国際金融の主役に躍り出た」と褒めたたえた。

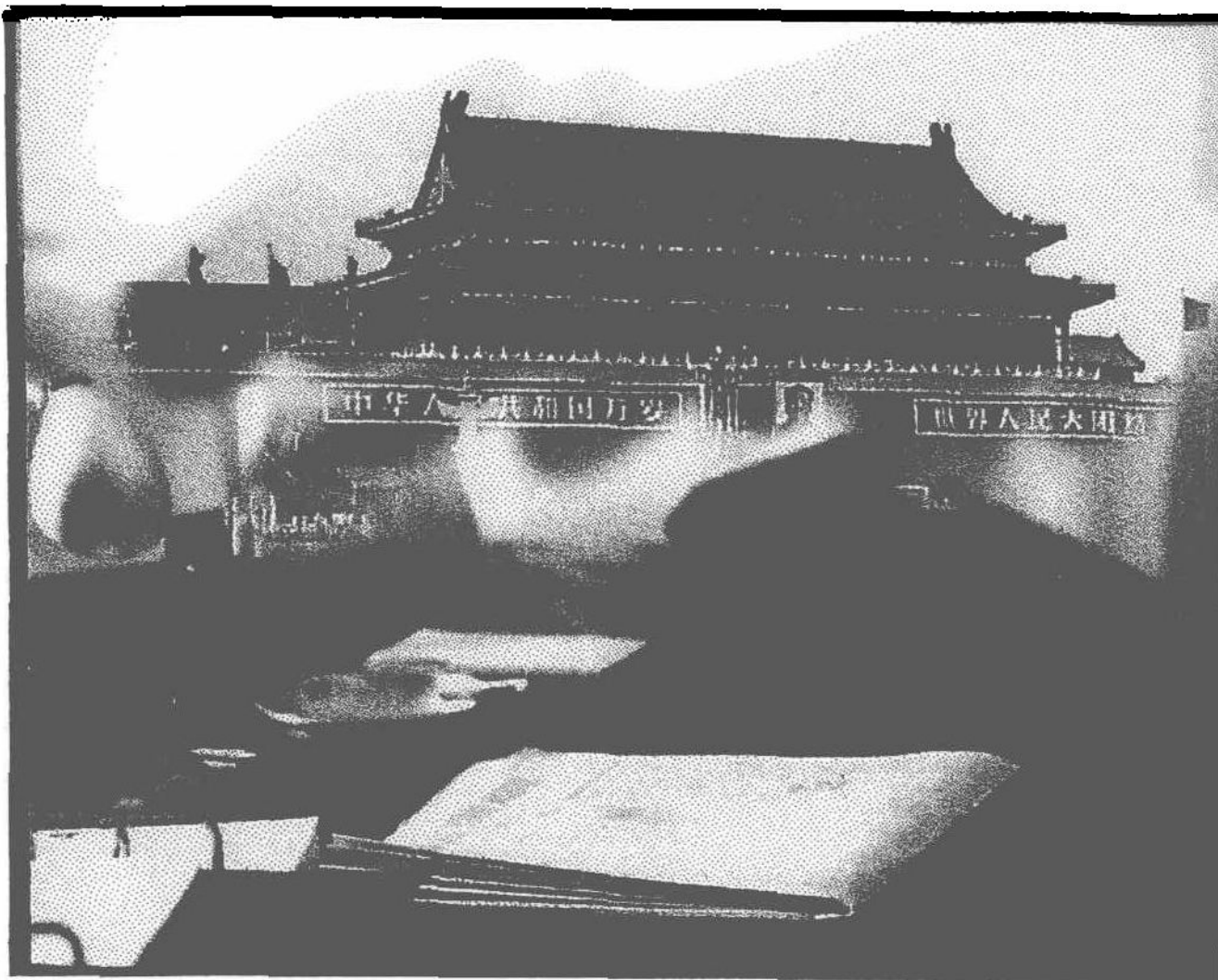
しかし、円が二一〇円にまで安くなると、さすがの江沢民も、ついにしびれをきらしていた。

「ロシアのルーブルが切り下げられてなお、わが国は元の切り下げをしないように踏みとどまってきた。しかし、もう限界だ。円安放置は、日米の責任である。わが国の元を二五％切り下げる」

が、元が切り下げられると、円にプレッシャーがかかる。円がまた安くなる。また元を切り下げざるをえなくなった。

ホワイトハウスにいるハックフォード大統領に、
朱鎔基チューロンチーにつづいて首相になった郭クオ宗オン元ツオンから国際電話が入った。

「このまま円安がつづく、また元を切り下げざる



をえなくなる」

「わかっております」

「わが国の問題だけではなく、世界の為替切り下げ競争がはじまる。EU（欧州連合）以外の、ロシア、中南米、カナダにも飛火（とびひ）していく。アメリカの輸出入の六割を占めるのは、カナダとメキシコでしょう。その二国が通貨の切り下げをすると、ドルはもたなくなる。元の切り下げ、ドルの切り下げがぶつかり合えば、決済手段がなくなって、世界の貿易はストップする。どこの通貨も信じられなくなる。世界恐慌に突入する。日本も、さらに円高となつて、切り下げ競争に参入していく。まさに一九二九年の大恐慌のようになってしまう」

「わかりました。なんとかして、円安を止めましょう」

ハックフォード大統領は、ただちにマイク・ガーナー財務長官をホワイトハウス一階の大統領執務室に呼んだ。

ガーナー財務長官に相談すると、まわりに人はい

なかったが、彼はつい声を低くしてささやくようにいった。

「アイザック・カルロスを使いましょう」

アイザック・カルロスは、世界的な謎の投機資金ヘッジファンドの運用者として世界の運命を握っていると恐れられている。「現代の鍊金術師^{れんきんじゆつ}」と呼ばれている。

ハックフォード大統領はいった。

「それと、カルロスの右腕として活躍している日本人がいたな」

「カツヤ・マツザキですね」

「そう。カツヤ・マツザキだ。日本人を一枚噛^かまさないで、成功はすまい」

オルセン財務長官は二日後、アイザック・カルロスと松崎をホワイトハウスに呼んだ。

さて、このカツヤ・マツザキとは何者なのか……。

1章 ヘッドハンティング

——一九九七年七月

1

松崎克也^{まつざきかつや}は、東京中野区^{なかの}にある自宅二階の寝室に向かう階段を、一日の充実感に満たされつつゆっくりと上がりかけた。

世界最大規模の資産運用会社、レインボー・グループ・レインボー投信のファンドマネージャーである彼は、自分が精神的にも身体的にも最高のコンディションでのぞまないと毎日ベストの判断を下したり世界でもトップクラスの運用成績を残すことができないことを知っている。よほどのことがないかぎり夜の九時半には寝てしまう。多少狂うこともあるが、遅くとも十時には寝ている。

朝から万全の体制で仕事に取り組むことが彼の信条であり、そのためには、八時間は寝ることが必要だ。

一九九七年（平成九年）七月二十九日のこの夜も、夕食を終え、九時半ちょうどに二階の寝室へ向かったところである。

ダイニングルームの電話が鳴った。

妻の真由美^{まゆみ}が電話に出、松崎を呼んだ。

「サムソンの犬神光^{いぬがみかり}さんからです」

松崎は、欧米人を想わせる彫^{ほり}の深い顔をしかめ、いぶかしく思った。

へ犬神さんから、またどうして……」

犬神光は、証券界の“伝説の人物”である。一九九三年春、高額納税者番付で、九二位にランクされた。その納税額は、約三億四〇〇〇万円。推定所得は、約七億四〇〇〇万円であった。花形野球選手のおちあい^{おちあいひろみつ}の約三倍である。しかも、そのすべてが給与。“年収七億円の日本最高給のサラリーマン”として脚光をあびたのだ。

日本の上場会社の社長の平均年収は、四〇〇〇万円あまり。超一流といわれる企業で、長い年月、社長、会長を務めている人でも、七〇〇〇万円から八〇〇〇万円もらえればよいところである。オーナー経営者でもない限り一億円を超えることはまずない。それなのに、大神は、七億円を超える金を一年で所得として稼いだのである。

大神は、日本のサムソンCEO（チーフ・エグゼクティブ・オフィサー、最高経営責任者）を経て、いまはサムソンの米国本社副会長も務めている。ついにアメリカ・サムソン本社経営委員会のメンバー一三人のひとりに就任した。アメリカの金融機関で、本社の最高意志決定機関に日本人が入っているのは、唯一サムソンだけである。

アメリカ誌『ビジネスウィーク』は、『東京のサムソンの男——彼はマネー・マシーン』のタイトルで、一ページ半を割き、写真入りでインタビューを載せた。

現在、なんと年俸は六〇億円にものぼるとささや

かれている。

松崎は、大神とはパーティーの席で三回、パーティーの流れで銀座のクラブで二回飲んだことがあるだけだ。特別の深い関係はない。

松崎は上りかけていた階段を、一メートル九〇センチもある身体を屈めるようにして降り、階段の上り口にある電話を長い腕をのばしてとった。

大神は、辣腕（らつわん）トレーダーとして鳴らした男とは思えぬ、妙に甘い雰囲気の声でささやいた。

「夜分にすみません。大神です。大至急お会いしたい」

「明日の昼十二時なら」

「帝国ホテルに、わたしの名で部屋をとっておきます。食事でもしながら話しましょう」

レストランではなく、わざわざホテルの部屋をとってまで会いたいというには、よほどの用件であろう。たんに市況について語りあおう、というわけではあるまい。

へおれをヘッドハンティングしよう、というわけか

……

翌七月三十日の正午、松崎克也は帝国ホテルを訪ねた。帝国ホテルは、レインボーのある日比谷の富国生命ビルから歩いて五分もかからない。

犬神の部屋のチャイムを鳴らした。ドアが開いた。

ふっくらとした下ぶくれの、甘い感じの笑顔がのぞいた。

縁無し眼鏡越しに松崎を見る大きな眼は、優しい光に満たされている。

犬神は、右手を差し出してきた。外資系の会社に長く勤めている人間の習慣で、つい手を差し出し握手をもとめてくる。

松崎もすかさず右手を差し出し、力強くにぎった。

部屋にはベッドはない。応接セットがあるだけの、会談専用である。

テーブルの上には、すでに鮎すしが用意されていた。

松崎の眼がその鮎にかすかに走ると、犬神がすま

なさそうにいった。

「今日は、ぜひふたりきりで話したいことがある。途中でホテルのボーイに入って来られても困るので、前もって鮎をとっておいだ」

松崎は、ソファに座るといった。

「あなたは日本で最初に『裁定取引』で大儲けした。先見の明にあらためて感心します」

犬神は、両手を外人のように大げさに広げた。

「おれにとってはおどろくほどシンプルなゲームだったよ」

それからビールに口をつけて、嘲笑ちやうしやうするようにいった。

「ところが、日本の証券会社には、まったくそれがわからなかったな」

「まるで魔法でも使ったように映ったんでしょね」

犬神に大きなチャンスが訪れるのは、一九八五年のことだ。日本で債券先物市場がスタートすると聞くと、犬神の行動は早かった。